

現代文化学科開設に寄せて

立教大学社会学部は1958年の創設以来44年を数えるが、その間、現代社会の社会集団構造・コミュニケーション、産業社会の諸関係、余暇と自己実現行動、を主要な研究・教育の分野とし、それぞれ社会学科、産業関係学科、観光学科がその課題に対応してきた。そして現実の社会、産業、文化に関心を持つ、調査やフィールドワークを通じて着実な認識手段を身に付けた学生たちを養成してきた。各界で活躍する卒業生はおよそ19,000名を数え、また大学院社会学研究科では大学院生の研究指導に努め、今日国内外の大学に勤務する約80名の研究者を生んできた。

上記の3学科の1つである観光学科は、余暇文化行動が重要性を増してくるという社会の変化と要請、および学問としての観光学の自立条件が成熟したことを背景に、1998年度に「観光学部」として武蔵野新座キャンパスに独立した。社会学部では従来から、「社会」「産業」「文化」の3つの領域を専門的に、かつ相関的・総合的に研究・教育すべく3学科体制をとってきた。このため、観光学科が一部を担ってきた文化の領域について新たな角度から研究・教育を行う学科として、かつ新しい時代を見据えた改革として、「現代文化学科」を2002年度に設置した。

今日の社会は、サービス産業（第三次産業）の比重が高まり、モノの製造よりは、知識、情報、サービスの提供が経済の中心をなす「脱工業化」（ポスト＝インダストリアリゼーション）の過程にある。脱工業化による社会生活の変容が進行する中で、今日様々な文化問題が社会的重要性を増していることに、われわれは洞察力を持たなければならない。すなわち、地域生活における多民族化、多文化化の進行、国際化・グローバル化を反映する都市化と都市文化の展開、ライフスタイルと生活の質の追求に関連しての環境問題への関心と要求の高まり、などがそれである。これら文化的問題に教育・研究機関が対応することは、いまや差し迫った社会的要請となっている。これら「現代文化」の諸問題を新たな角度から教育・研究するため、社会学部に「現代文化学科」を設置することが求められたゆえんである。

このような観点に立ち、現代文化学科は「多文化化」、「都市化社会と文化」、「環境と文化」の3つを重点領域としている。このうち多文化化、とくにエスニシティの問題は立教大学が所在する池袋において、日本のなかでもいち早く顕在化した。社会学部ではこうした問題について率先して地域コミュニティと連携しながら取り組み、研究成果を蓄積してきた。また、都市化社会については、都市型大学としてのアイデンティティを持つ立教大学が常に考えるべき必要のある研究課題である。さらに環境問題は、今日的なテーマであるとともに文化の側面を捉えることなしに議論することのできない領域である。現代文化学科は、これらの問題を広い意味での文化として捉え、立教大学のアイデンティティと社会学部の伝統に基づきながら、教育・研究を展開していこうとするものである。

幸いなことに、初年度は学生募集90名のところに1,800名強の受験生を得ることができた。現代文化への関心の高さを改めて感じている。今後はスタッフ一同、教育・研究に積極果敢に取り組み、新しい時代における文化研究の成果を多に発信していきたいと考えている。

本号に特集として収録されているのは、現代文化学科開設記念として2002年11月に開催したシンポジウム「現代文化の葛藤と人間の未来」の記録である。学外からお招きした2名の先生とともに、現代文化の動向、そして現代文化学科の方向性を探る機会を得ることができた。多忙ななか、貴重なご講演をいただいた平野健一郎先生（早稲田大学）、町村敬志先生（一橋大学）に改めて感謝申し上げたい。

2003年3月

社会学部長

白石典義